
空の境界 完全斯界ファントムズ

南回転

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の境界 完全斯界ファンタムズ

【Zコード】

Z0294Z

【作者名】

南回転

【あらすじ】

奈須きのこ原作の『空の境界』の一次創作作品となります。原作完結から約2年後を想定した、短編連作形式の嘘続編です。原作の展開を強く意識しつつも、オリキャラ、オリジナル要素を含みます。二次創作においてのオリジナルが苦手な人はご注意下さい。

矛盾点、誤字脱字、行頭、行間の乱れ、ルビ等、こちらでも見つけ次第対処していきますが、もし発見しましたら教えて頂けると幸いです。もちろん感想もお待ちしています。

序章 1999年 3月

目覚め自体は悪くなくいつも通りだったが、そのとき日に映つたものはどれも見覚えがなく、おれは最初に警戒をしなければならなかつた。

白い照明、白い天井、白いベッド……淡いグリーンのカーテン以外は、大抵が白いもので出来ていて部屋だ。薬品の匂いもするし、すぐに病院だと分かる。

問題はこれからだ。何故おれが病院にいるのか、その理由が分からぬ。思い出せない。いや、思い出せないぐらいショックキングなことがあつたからこそ、問答無用で病院の一室までやつてきたということが。

じゃあ、今のおれはどんな状況で……何が以前と違うのだろうか。それを知らないと、現実を埋め合わせることは出来ないが、考えたところで分かるものでもない。

妙に冷静な自分を、不毛な思考で焦らしていると、唐突にドアが開いた。

部屋は個室のようだつたが入室に際して、一言の断りもない。現れたのは、白いシャツにオレンジの外套を手に提げた、派手なのが地味なのがケバいのかよく分からぬ女だつた。何を目指しているのかは不明だが、お世辞にもお洒落とは言えない感じだ。

そんな、似合つているとは言い難い格好に反して、問題なく美人の部類に入る顔と、それに掛けられた眼鏡だけは、完成品と呼べるほど似合つていた。

印象的な、奇妙な女だつた。

「あんたは？」

おれの問いに対して、返事はすぐになかった。女は病室を興味な

さげに歩き、無遠慮な動作でベッド脇の丸椅子を引いて、おれの前に座った。座るとき、服から微かにタバコの臭いがした。

「君の……そうね、安っぽくても分かりやすい言葉を使うなら、命の恩人ってところかしら。もとも君は一人でも生きていただろうから、表現としては適切ではないけど」

「はあ……」

「私は行方不明だった君を発見した人よ。救つたわけではないけど、あのままだったら、社会的に死んだも同然だったろうから、感謝される謂はあるかもね」

恩を着せようとしているのか、そういう冗談なのか判断できない。もしかしたら、そういう謎っぽさを武器にして生きている女なのかもしれないと思った。

とにかく、この女が今のおれがここにいる理由に大きく関与していることだけは間違いないようだ。

「……行方不明」

「ええ、ほとんどの人間が死体になっていた事件。君の家族も含めてね」

一度で理解できることを言わない女だつた。すぐには飲み込みきれない事を淡々と口にする。

ショックを受けるよりも疑念が先だつた。お袋がそう簡単にくたばるとは思えなかつたのと、この女の抜群の胡散臭さのせいだ。裏があるのは間違いない。この女の心理だけではなく、今の状況を作り出している要因全てに。

だが、それを追求する事はせずにおいた。知つてもどうする事も出来ないと分かるぐらいには冷静だつた。

「それでおれに何の用なんだ？ お袋が死んだつて伝えに来るのは、恩人の仕事じゃないだろ。葬儀屋つてわけでもなさそうだし。言つちやなんだが、あんたは疑わしい」

そう言つた途端何がおかしかつたのか女は俯いて、くつくつと茹だつたように含み笑いを始め、我慢できなくなつたのか噴出し、し

まいに大口開けて破顔した。

「疑わしい、ははつ、疑わしいね。確かに。いやあ、まいったわね。君はまったく予想以上に、ねえ」

一頻り笑い終えた女は居住まいを正して、再びおれに向き直った。

「私は蒼崎橙子。あおさきとうじ名刺はいる？ って切らしてたか、そういうえば前も切らしてたような……」

手に持っていたコートのポケットを漁つて、レシートを一枚取り出した女は、その裏に自前のボールペンで『蒼崎橙子』と自分の名前を書いておれに寄越した。

たおやかな物腰とは裏腹に、不誠実な人間なのは疑いようもない。

「職業は人形師つてことにしておきましょうか。他にも建築とか、たまにカウンセリングとかもやつてるけど、本業はそれ、本業と副業に繋がりがなさ過ぎて、リアクションに困る。怪しい。

「君の名前を聞いてもいい？」

即答は出来なかつた。自分の名前がすぐに出でこなかつたからだ。

「桃園寺、梓記」

蒼崎が頷いて初めて、おそるおそる口にした名前が、本当に自分の名前だつたのだと安心することが出来た。

「名前以外に何か覚えていることは？」

お袋の性格とか、自分の年齢とか、高校中退してフリーターだつたこととか……断片的な情報はあるが、記憶として上手く絵にはならなかつた。

「記憶に混乱がある？」

正確には混乱というよりも、抜け落ちているような感じだつたが、記憶が記憶の役割を果たしていないなら、どんな言い方をしたつて一緒だ。

認めざるを得ないだろう。おれは頷いた。

「そう。でもね、それは代償としてはずつと安い、とも言える。記憶が人の外延^{がいえん}をなすものとして、決して小さくない意義を持つているとしてもね。命があることを思えば、ね。桃園寺くんが巻き込まれた事件つていうのは、細かい内容は言えない決まりなんだけれど、およそ助かるような事件ではなかつた」

目を逸らさないまま断言する、蒼崎の言葉の裏側には、自身もその事件とやらに關つていたという含みがあつた。

「社会的に人間的に根源的にも抹殺されて、人為的に覆い隠さなければ、場合によって致命的な何かが崩壊する、そういう事件だつた」しかし、流石に大げさだる。

「それでも、君はここにいる。間違いなく生きている。私は恩人だからではなく、そんな君に興味があつたからここに来たの。それで納得してもらえる?」

「納得も何も、あんたがそういう言つならうなんだり」

「そうね。君が決められる事ではなかつたわね」
もつともだと言わんばかりに、蒼崎は頷いた。

「まあ、身寄りのないこれから一人で生きていかなければならぬ君を、自称恩人として手助けしてあげよう、なんて考えてもらひよ?」

「それは、善意じゃなくて、あんたの個人的興味の延長だと受け取つた方がいいのか?」

「退院したら行くところないでしよう? 君が住んでいた家はもう取り壊しが決まっているしね。私の個人的な意思は、今の桃園寺君が問題するべきところなのかしら?」

「選択肢はないか」

「施設に行きたくなかったらね。あの場所こそ、純然たる善意なんて存在しない場所だと思うんだけど」

どうする? と蒼崎は首を傾げた。その仕草は、服装のセンスや胡散臭さを差し引いても、十分魅力的な部類だつた。騙されても

いいかな、と思つぐりこには。

一週間ほど無為な時間が過ぎた。

身体的に異常が無く意識があれば、精神を専門としてない病院からは追い出される。居心地の悪いベッドに拘束される生活ともこれでお別れ。名残を惜しまないでもないが、……素材良さを一度踏みにじつてから調理したとしか思えない、破壊力重視の病院食はもう一度と口にしたくないので、綺麗な看護婦さんの思い出だけ頂戴し、後は全部忘ることにした。

何はともあれ退院だ。

体の機能は正常にも関らず、原因不明の昏睡状態だったおれの門出を、担当医が肩の荷が降りたような安堵の表情で送り出してくれた。

天気は朝から多少冷え込むものの快晴。迎えに来た蒼崎には似合わない空模様だった。

入院中にもこの女は何度が見舞いに来たが、病院食に苦しむおれに一度として差し入れを寄越すようなこともなく、手ぶらでやつて来ては、ひたすら気の利かない「冗談でお茶を濁していた。

悪党ではないが意地はあまりよくない、といいうのが現状の蒼崎について固まりつつあるイメージ。

迎えに来た蒼崎は、院内では手に掛けていたきつい橙のコートを着ていて、これまでと少し印象が違っていた。

「それ着てここまで来たのか？」

おれはつい、そんな当たり前のことを聞いた。

「そうだけど、どうして？」

蒼崎は何故聞かれたのか、まったく理解出来なったようだ。こいつはときはどう言つたらしいのだなつ。

『ちょっと違和感ありますよそのコート』

失礼じゃないのは字面だけで、他全てにおいて弁えるべき部分が

弁えられていないので没。

結局、蒼崎のファッションセンスについて言及することは、そのときもそれから先もなかつた。大分後になつて、彼女が常に橙色を纏う理由を知つたが、それは同時に似合わない理由でもあって、何故と問い合わせる事も出来なくなつてしまつた。

それから会話らしい会話も無く、おれは蒼崎の車に乗つて目的地に向かつた。

何度が見舞いに来たときの話では、『しばらくの間借りられて帰つて寝るぐらいには十分な部屋』に案内してくれることだつた。車の中は静かだつた。エンジン音とタイヤが路面をなめる音とシートから伝わる振動が、不要な思考を取り払つていいく。移動中おれはじつと窓の外を見ていた。風景は大通りから外れ、閑散とした郊外に変わつていた。

規則性のある外観の建物が乱立するいかにもな住宅街の一画で、蒼崎は車を止めてサイドブレーキを引く。

「ここよ」

愛想よく笑つて指し示した先は、特になんの異常も無いごく普通のマンションだつた。蒼崎の案内だから、もつと胡散臭い場所に連れて行かれるのかと思つていた。拍子抜けした感は否めない。

一人で階段を上がり、振られている番号以外は同一の規格であるドアが整列する中をさらに進む。お目当ての部屋のノブに鍵を差し入れて回すと、何の変哲も無い開錠音がして、その時点ではこれといつた驚きも無いまま部屋に通された。

「知り合いの部屋なんだけど、今出払つてしまはらく帰つてこないだろうから、好きに使つていいわよ」

「まだ引越してきたばかりつて感じだな」

「んー確かに住み始めてもう一年ぐらいになると思ひながいそれを聞いて絶句してしまつた。

「一年……」

室内はがらんとしていた、というか何も無いに等しかつた。

キッチンは綺麗というよりも明らかに使われておらず、居間にはベッドが一台と、電話が投げ捨てるように置かれている。カーテンリールに着物が下がつていて、この部屋に住んでいるという人物の人格を表すようなものは何もなかつた。冷蔵庫を空けてみても、水と氷と氷菓（全部ストロベリー）しか入っていない。およそ人の住んでいる部屋ではなかつた。

「あなたの知り合いつて、仙人か何かか？」

蒼崎は噴き出した。初めて会つたときから思つていたが、結構笑い声に特徴のある女だ。

「くくく、君は面白いなあ。しかし、仙人か。浮世離れしてゐるつて意味では、似たようなものかもね」

冷静に考へてもみれば蒼崎の知り合いつて時点で、まともな人間である可能性は、ほとんどなかつたのだ。それでもおれには、この世界でそれなりに自由に生きていくための手がかりが、蒼崎しかいなかつた。

覚悟を決めねばなるまい。

「あ、そこの着物とか押入れの下着とか、触つたり嗅いだりしちゃだめよ？」

「おまえなあ……」

基本的に蒼崎の冗談には、品性や倫理観が足りない。場合によつては訴えられるぞ。

「一応、うちの署員の恋人の部屋だからね。如何わしい人に貸したなんて知れたら、怒られちゃう」

自分の世界じゃなくて、日本国家の法律や広義の良識にのつとつた考え方で、ものを話して欲しいものだと思う。まあそもそも常識のある人間なら、部下の恋人の部屋を人に貸したりはしないが。

手に提げていたバッグから蒼崎はおもむろに、一冊のファイルを取り出して、キッチンに置いた。

「これ、君が昏睡する前に交流のあつた人のリスト。電話番号と現

住所が載つてゐるから、悪事以外のことには使うといいかな」

試しに手に取つて開いてみると、馴染みの顔から、よく行つていたコンビニの仲のいい店員まで、膨大な量が事細かにファイリングされていた。ありがたみよりもその労力の質に、寒気すら覚える。蒼崎が調べたのだろうか？ ちょっととした変態の所業である。

「それと、これ」

続けて取り出したのは時計だつた。日付表示のあるデジタルの小型置時計。特別のものではなく、普通に市販されているもの。見渡してみると室内には確かに時計がない。が、生活必需品というわけでもない。気を利かせたわけではなく、もつと別の意図があると判断すべきだろう。

「……君の時計を合わせておかないとな」

そう呟いて、おもむろに部屋の奥に移動した。窓を開けて部屋の中に光を入れる。

逆光の中には、蒼崎の後ろ姿は、顛倒に見ても美人のそれだったが、見とれている余裕は持ち合わせていなかつた。

「どういう意味だよ」

「そういえば教えていなかつたと思って」

背を向けたまま蒼崎が眼鏡を外した。

「1998年の春から、君を小川マンションで見つけるまでの間に流れた時間をね」

おれは反射的に渡されたデジタル時計を見ていた。

「せん……九百、九十九……」

現実がすぐに飲み込めたわけではない。何故今までそのことを気にしなかつたのか、最初はそればかりを思つた。

昏睡していた時間に無くなつていたものが多くすぎて、自分の身にまで考えが及ばなかつたのか。単に高を括つていたのか。なんて間抜けだ。

記憶の一部に混濁があつたから。それは言い訳に過ぎないだろう。

おれの記憶はどういう風に掘り返しても1998年までしかない。

それをはつきりと自覚してよつやく、一年近くも寝こけたという実感を得た。眠っている間に、自分といつ実体すら忘れつづいたとでもいうのか。

「長時間の眠り、意識の離反は、自分がここに在るといつ自信を遠ざけるものだ。しかし何度も言うが、桃園寺。お前はこれから一人で生きていかなければならない」

どうやらタバコを取り出したらしい。ライターのガスの音。それから、大きく息を吐き蒼崎の頭上に煙が上がり、すぐに窓の外の風にさらわれていった。

「お前に限らず、私は他人の生涯にあまり積極的に干渉するつもりも、まして説教をする気も無い。が……あの螺旋の中から、どうやつて這い出してきたのかには興味がある。お前の生きている理由にね。それを知るまでは呆けて貰つては困る。明確な根拠はないが、お前は現時点で『こちら側』の人間だからだ。望まなくとも、向こうから何かがやつてくるだろ?」

「あんたは……」

デジタル時計を握り締めたまま、おれは今の今まで何度も無い思い、そして一度は口に出した言葉を再度口にした。

「あんたは、一体、何者なんだ」

今一度問わなければいけない、今の蒼崎はそんな脅迫めいた雰囲気を纏っている。

一步足を下げる、回れ左。

取り払った眼鏡を、左手にだらしなく下げた蒼崎橙子という女は、おれの言葉に応えて口を開く。

「本職はしがない人形師だが……それとば別に魔術師なんてものもやつている」

タバコを咥えた蒼崎の口元が不敵な笑みを作る。

どんな嘘でも、信じなければそこから墜落してしまいそうな気

分にさせる、底の深い表情に、あやうくおれは飲み込んでしまうところだったが、からうじて踏みどじまる。

実体の分からぬ自称魔術師の正体よりも、初めてみた蒼崎の眼鏡を外した顔について、どうしても言わずにはいられなかつたことが、おれを辛うじて繋ぎとめていた。

おれは言った。

「あんた、目つき……悪いな

1999年3月。

おれは赤橙せきとうの魔術師まじゅしに出会つた。

人生の方位磁針を大幅に狂わせ、普通と呼べる範囲の平穏を相当量奪い去つたという意味においては、運命的な出会いに違ひなかつたのだろう。

幸か不幸か、必然が偶然か、そんなことに興味は無い。

確實に言えることは、あの女の存在をおれの生涯から消し去ることが出来ないということだけだ。

＜序章 1999年3月 了＞

序章（後書き）

序章です。次回1章の公開は2011/12/29までに行います。

第一章

第一章 幻想迷妄メテムサイコシス

八月になつたばかりの夜、事前に連絡もなく式さんがやつてきた。

「よ。相変わらず面倒くさそうな顔だな、桃園寺」

唐突に、問答無用で現れたこの女は、手提げのバックをぶら下げたまま、靴を脱ぎ、框を踏んで入つてくる。そして、勝手知つたるといった様子で、冷蔵を開けた。

「余りもの」

バッグから次々と、タッパーに詰められた煮物や和え物が出てきて、それを要領よく冷蔵に詰めていく。

「オレと幹也は明日からしばらくいいからさ、聞いてるだろ?」

「旅行行くんですよね」

その間、おれが両義の興信所で案件を受ける事も、聞いている。

氣の重い話だ。

「だから、その間に処理しどうくれ

「それは構いませんけどね」

タッパーを詰め終えた式さんは、立ち上がりてコチラを見る。

「なんだよ」

「一応、この部屋に今は若い男一人、つてことをそろそろ認識してもいいと思うんですけど」

「別に、オレがここに来るのは始めてじゃないだろ。これまでも、いつだつて部屋にはお前一人だつたじゃないか」

Hコバックをくるつと回して畳むと、式さんはそれを着物の袖に仕舞う。その隙を見て、骨のよつよつ細い手首を、おれは強引に掴んだ。

そして引き寄せる。

水面のようにゆらゆらと揺れる田。凜々しく光を放つ反面で、ともすればあつさりと碎けてしまいそうな、この世の中で両義式という人間しか持っていない、魔を孕んだ視線。

じつとおれを見つめ返す、その瞳が収まつた顔は白く、その周りにミディアムの黒髪が彩りを添えている。

化粧気はなく、ほとんど白と黒だけで頭部の色は構成されているが、それで十分完成品といえる出来だった。

「綺麗ですね、式さんは」

「子持ちの夫婦に何を言つてるんだか」

あくまでも式さんは平静だ。

「世の中には、夫婦をありたががる風習があるんですよ」

「日本だけだろ、それ」

「髪、いつ頃からでしたっけ、自分で切らなくなつたの」

おれが握つていない方の手で、式さんが襟足の髪を払う。かつては、不揃いで固かつた髪が、ふわりと屈いで、彼女の匂いをおれの方に運んだ。

「結婚してからだな」

それ以前は、着物と、鋭い目と、不揃いな髪が式さんのトレードマークだったのだが、今はお付のスタイルリストによつて、毛先が綺麗に整えられている。

「いろいろ、心境の変化もあつたようだ

おれは空いている手で式さんの肩に触れる。

以前は着物の裾に触れたりするだけで、刺すと言わんばかりに睨まれたものだが、最近の式さんは柔らかくなつたといつも、頓着しなくなつた。多分これも結婚してからだろつ。

「変らない事の方が少ないだろ」

そう口にした式さんの態度は確信に満ち溢れていて、美しい。なで肩を上つて、おれは着物の襟に手を掛けた。体をさらに寄せた。

「想像してみる」

息が掛かるほど近さにも、式さん動搖とかそういう素振りを見せることなく、あくまでも淡々と告げる。

「もし、オレがここでお前に『構わない』と答えて『その先』にいつたとするだろ」

「行つたとまじょう」

「それが幹也に発覚したとする」

「拙い状況ですね」

一般的には修羅場だ。

「そしたら、幹也はどういう行動取るか。あいつの性格的にキレたり暴力なんて、単純な方法は取らないし、それでケリもつかないだろ。数少ない部下であるお前に對して、温情も掛けて容赦もして、お前やオレの落ち度よりも、むしろ救済の余地を闇雲に探すさ。そして勝手に納得して許してしまう。黒洞幹也はそういう奴だから仕方ない。問題はここからだ。あいつは、あれで結構嫉妬深いというか思いつめるんだ。そのくせ感情の整理は物凄く下手。そこが面倒くさい。そしてお前は、その面倒くさい上司の下に、それから毎日通う事に」

「よくわかりました。つていうか、最近になつて式さん燈子みたいな言い回しが増えましたね」

「懐かしいだろ?」

「別にそつは思ひませんけど……」

手を離す。

この両義式という女性が、伴侶として選んだ相手は黒洞幹也という。苗字が違うのは正式な結婚ではなく、いわゆる事実婚だからだ。幹也さんは現在、両義のお家専属の興信所で所長。おれもその職員として、一昨年から働いている。きっかけは、幹也さんの誘いだ。あの人は、どうしようもないお人好しで、会つて一年もたつてないおれを、人手は必要だから、とか、最初の職員は信用できる人がいいとか、何かと理由をつけて雇いたがつた。

身寄りのないおれに、馬鹿馬鹿しいぐらい本気で同情して、給料といつ名目で合法的かつ道徳的に金と生活を「えようと必死だったのだ。

白々しいぐらいの一般論を展開するといひは、好きになれない。正直、面倒くさい。けど、嫌いかといふと、そうではないと言い切れる。悪い人じやないとか、感謝はしている、とか半端な気持ちではなく、明確な好意として表現できるだらう。

ただ、それを気の迷いから裏切つてしまつぐらい、式さんが魅力的、というだけの話。

もちろん「冗談のつもりだ。幹也さんを裏切るのも、怒りらしい怒りを見せないあの人から追求を受けるのも嫌だし。

おれが手を離した後、乱れた着物の襟を正す。しつとりとした仕草だったが、艶っぽいとかはない。顔立ちと合わせて体つきも中性的で、女としては正直見るところの少ない姿だ。

この人の何がそんなに好きなのか。

多分目かな、と思う。おれたちには見えないものを映す目は、その中に静かな世界を存在させている。おれたちとは違う完全な世界を見ているのかもしれない。

「こつちに来るときに、地下鉄を使つたんだけどさ」

元々、式さんが住んでいたときよりは、部屋の中の物は増えているが、その中でも変わらず、同じ位置にあるベッドに、式さんは腰を下ろした。無遠慮、無防備、無警戒。そういうことも、好きかもしない。

「痴漢に遭いませんでした?」

おれも床に腰を下ろす。

「休日の夜だぞ。スカスカだつたよ」

つまらないお返事が頂いた後、式さんは唐突にこんなことを言い出した。

「人魚を見たんだ」

「にんぎょ?」

「そ。人間の体に、魚の足がついたやつ」

童話なんかに出てくる、オーソドックスな姿をイメージする。

「地下鉄ですか？」

「うん。トンネルの中を泳いでた」

見るではなく、見るつてやつだらう。おれには理解出来ないが、式さんには判る。そういう普通にはない感覚がある。

「夢みたいな話ですね」

「夢か。そうだな、まるで……」

そこから先を続けることなく、式さんは窓の方に視線を向けた。

『オレは夢のようだつた』

そんなことを前に、式さんが漏らしたことがある。人とは違うものを見ている人にとって、おれたちが見ている当たり前の世界は、視覚の外、目を閉じたときにだけ存在している、夢のようなものなかもしれない。

「式さん？」

黙つてしまつた式さんが、呼びかけに反応してこちらを向く。

「ああ、悪い。年を取ると、ぼうつとする事が多いな」

「年つて……まだ二十一でしょ」

「そういう事じゃない」

式さんは屈んで乱れていた着物の裾を正す。

「数字はあまり意味がない。自分がどう在ってきたのかは、自分にしか計れないものもあるのね」

そしてよく分からぬことを言つ。

式さんはたまに『冗談は言つが、基本的に本質の事を話す。』というか本質のことしか話さない。理解するための、重要な課程なんかも省略して言つので、どうしても分かりにくい。問題集の答えだけ見せられて、問題を想像してください、と言われているようなものだ。

逆に橙子は、余計な過程ばかり話してなかなか答えを出さない。言葉の数も圧倒的に多い。橙子と式さんでは、話のスタイルは正反対であるものの、要約しないつてことと、返答に困るつて事だけは共

通していた。

こういうときは、好きに話してもいいのを待つに限る。

「あの人魚だつて、多分そうなんだ。キレイに無垢でありたいといなが、どうしても肯定できない事があつて、人間をやめないといけなくなつた。少し、鮮花に似ていたな」

鮮花というのは、幹也さんの妹で、式さんにとつては事実上の義妹になる。

元々は、橙子の弟子だつたが（よりもよつてあんなやつかいなババアの弟子になつたんだと正直思つ）、師が突然事務所を置んで姿を消したので、後に出来た両義の興信所に流れ、たまに手伝いとか冷やかしにやつてくる。

見た目は抜群にいいけど、負けん気が強くて、何かと面倒くさい子だ。丁大落ちた、と言つと烈火の如く怒り狂う予備校生。

まあ確かに、プライドが高い子だし、何かと受け入れ難い事実があつたことか、綺麗なところは、式さんの言つ人魚の話に合致はするけど。

おれが考えていたのはまったく別の事だ。

「鮮花……鮮花かあ……」

幹也さんと式さんの旅行中、おれ一人で事務所にいるつて事は、その間鮮花の相手を一人でしなければいけないつてことだ。

鮮花は式さんに因縁があるらしく、兄である幹也さんと仲良くすることを、かなり嫌がつてゐる。

それが旅行に行つたとなつたら、まあ、おとなしくはしてこまい。暴れるかもしねり。

「何だ、お前たちまだ何か上手くいつてないのか？」

その上、鮮花はおれに対しても何か、言いつつの無い怒り覚えているらしい。

「上手くいくも何も……顔を合わせる度に微妙に不機嫌なんですね。何に怒つてるのかもよくわかんなくて」

その原因というのが、どうやら俺にあるらしいのだが、身に覚え

が無い。

「どうせ前のことだから、つまらない」と呟いて怒らせたんだが「こや、やつこいつのなら次会つときこせ、けりつとしてるんで」

「つて」とせ、やつたのか

「まあ、会つ度に何かしら怒らせてますね」

式さんが流石に呆れた顔をする。

「断言するなよ……」

おれだつて、本当に毎回怒らせてこるかなんて覚えていない。でも、からかうと可愛い。やらない理由がないが、間違いなくやつてると確信出来るだけだ。

「まあ、お前の軽口ぐらいで鮮花が本気で腹を立てるなんて、オレも思つてないけどさ」

「ですよね。なんかいつも、それ以外のことでもつとしている感じではあるんですけど」

「心当たりはないのか？」

おれは首を横に振るしかない。

「全然。ただ、もしかすると、おれが直接何かしたつてわけじゃないのかも」

間接的に迷惑をかけたつて場合だけど、それだとおれにはどうしようもない。

「ありえない話じやないな。案外お前たち、どこかで会つたりしてさ」

その可能性も、考えなかつたわけじゃない。

けど礼園のお嬢様が、高校中退のフリーターだつたおれと接触するつて、まずないことのように思つ。

けど人生何が起こつているかわからない。

おれの脳髄でまだ現実と結びつくなく、眠つたままになつている記憶の中には、もしかすると鮮花のものがあるのかもしけない。

「ま、頑張れ」

おれが少し眞面目に考えよつとしたといひで、唐突に式さんは突

き放すような言い方に変えた。

「急に人事になりましたね」

「まあ、実際オレには関係ないし。お前たちが何とかすることだ。

桃園寺、お前は鮮花が嫌いか？」

「鮮花のことは普通に好きですよ」

式さんに感じるような、異性間を超えて惹きつけられる魅力とは違つて、純粹に女の子として好きということだ。

「ならないじゃないか」

何がいいのかわからない。ただ式さんは意味深ににやにやしているだけだ。何を聞いても多分まともな答えはないだろう。

「とにかく明日からしばらく、よろしく頼むよ」

堂々と面倒を押し付ける言い草に、清々しさを感じる。

「はいはい」

それで会話は終わつた。

式さんはしばらくおれの部屋 かつて自分が住んでいた部屋を懐かしむように、一時間ほどぼけつとしてから帰つていった。

変わらない事の方が少ないと言つた当人だが、猫みたに氣分屋なところはまったく変わりない。

彼女をアパートの下まで送り届けてから、おれは二年前まではなかつたテレビの電源を点ける。

『 正午ごろ、地下鉄丁線S駅内のホームで、5人の女性が相次いで飛び降りました。調べでは……』

ニュースキャスターの無機的な語りを眺める。

「人魚か……」

あれつて、人を誘い込んだりもするんだっけか？

両義の興信所、すなわち幹也さんとおれの職場は、案外地味などにある。

近所に大手の家電機器の会社があるオフィス街から、徒歩20分ほど離れた場所にある東科ビルという細長い建物、その二階。

5階建てなのだが、他の階の看板は空欄のまま。

バブル期の失敗建築を絵に描いたような立地の悪さと天井の低さから始まり、通気性悪く、夏暑くて冬も汗ばむ、エアコンのために作られたような部屋が売りだ。

しかも狭い。一階はポストとエレベーターのためにあるよつた場所である事から、上階の程度も知れるだろう。

見るからに役にたたなそうな場所だが、組関係の興信所のあるべき場所としては、あつているのではないかと思う。

部屋の中はシンプルで、所長が使う大きなデスクと、その3分の2ぐらいのサイズのおれデスク。客は両義の関係者が身内だけのだから、応接セットも小ぶりなテーブルに一人掛けのソファが一組向き合っているだけ。後は資料や本のある棚。

それでも、一人には少し広いぐらいの場所はある。

おれは自分のデスクに足を乗せて天井を仰いだ。

今朝、来たときに投函がないかと、ポストをチエックした。しなきやよかつたと思った。

怪しげな封筒が入つていて、見てみると蒼崎橙子の名前。

一年ほど前に唐突に行方を暗ましたクソババアの便りが、ろくなものであるわけがない。

そもそも橙子がろくでなしだったわけで。

破り捨てなかつたことにしてやりたいが、そういうわけにも行かず、しかし見る気もないまま途方にくれていた。

面倒なことつていうのは重なるもの。

扉に取り付けられた、旧型のテンキーがピッピッと警戒な音を立てロックを解除する。

セキュリティとしてはザル極まりないが、中に入がいる状態であれば、その電子音を聞いて、入ってくる人間をある程度特定出来るのは、多少便利かもしれない。

「こんにちわー」

愛想を省き、無駄のない棒読みで入ってきたのは黒桐鮮花。幹也さんの（際立つて外見が）よく出来た妹さんだ。

「おーっす

「あれ？ 貴方だけなの、兄さんは？」

鮮花の言つ、貴方、つてのが少し他人行儀で刺々しい。それが鮮花に感じる、妙な不機嫌さの片鱗だ。素が出るとすぐに「あんた」とかになるから、確実に何か意図があるんだろうけど、聞きづらい。結果淡々と世間話を続けることになる。

「今日から一週間ぐらいいねーよ」

「え……なんで？」

「なんであつて、旅行だよ」

「どこに？」

鮮花の声に不機嫌な音色が混じり始めた。

「それは聞いてねーな」

「誰と！？」

「式さんとかな」

「なんで！？」

「新婚の夫婦が旅行するのは、普通の事だろ」

「聞いてないわよ！」

やつぱりね、という話。

予想通り、式さんは鮮花に 多分幹也さんにも 内緒で、出かけていったのだろう。

幹也さんの性格上、鮮花に對して故意に内緒にしたりはしないだろつし。まあ、あの人はあれで、大学やめて実家を飛び出した前歴があるから、もしかするとやるかもしぬないが。

知つていたら鮮花がほうつておくわけない。何故放つておかないので、その理由は、兄弟愛で片付けるにはやや生々しいので割愛するが。

鮮花が騒がないように、式さんも準備していたのだらう。本当に

水入らずでいきたかつたということだ。

昨日のは差し入れというか、餞別だつたに違いない。美味かつたが。これから、一週間は彼女の愚痴を聞いて過ごすのか。

勤勉さにはあまり定評がないというか、面倒なことは避けて、手短に生きてきたいおれとしづや、気の重い話だ。

見た目は可愛いんだけどさ。

「何であなたは平然としてるのよー。」

お嬢様学校出身のくせにすぐ素になつてあんたとか声ひつし、持つてた鞄はソファに投げつけるし、大股かつ早歩きでこいつ来るし、襟掴んでくるし。

何で神様はこの子を、置物として作らなかつたんだらうかと、時々思うことがある。

「平然も何も、聞いてたからな」

「どうして、あんたは知ってるのよ」

「それが不公平だと言わんばかりに詰め寄つてくる。

「おれはつていうか、むしろ鮮花だけが知らなかつたんだろ」

一瞬顔を真つ赤にしたが、納得するものがあつたのが、冷静さを取り戻そうかとするように、頭を抑える。

「……式の仕業ね」

「おれも梓記しきだけど」

「くだらない茶々入れないで」

そもそもそだなつて事で、黙つて紙に視線を戻したが、そこには鮮花よりも面倒くさい、蒼崎の文字があるだけだった。

「あーもう、油断した。よりもよつて、模試の期間中を狙つなんて」

予備校生はタイヘンダナー。

今口にしたらまずぶつ飛ばされるので、心の中だけで煽る。

鮮花はぶつぶつと小声で何かをつぶやきながら、むしゃくしゃした様子でトイレに入つていった。

いつもよりは大人しいと思つたら、つまり今日は、そういう日か。

と呟かない推測をしてみる。

十分ほどして、溜息をついた鮮花が出てきた。

あまり見る場所もなく、景色も悪いビル内だ。彼女の興味はすぐ
に、おれの手中にある紙に向いた。

「なにそれ？」

許可もなく問答無用で紙を掴んで、ひつたくる。

「一応、顧客の依頼書なんだけどな

鮮花は正式な社員ではない。

「いいじゃない、別に」

守秘義務、企業や事業内容で守られるべき秘密とかは無視ですか。
これだから予備校生は。暇なのか？

「なんか言つた？」

「いやー」

危ない危ない。

「つてこれ、橙子さんのじゃない！？」

「ああ」

「行方が分かつたの？」

「なんでそうなる。勝手に来た。偽者かもしねりない」

「字はそつくり。間違いないわよ」

まだ封筒見ただけなのに、わかるものなのか。それなりに長く付
き合つた師と弟子だからこそ？

まあ、蒼崎なんてかつたるい名前を騙つてわざわざこんなチンケ
な興信所に投函してくる物好きもいないだらうが。

「えつと、なになに……」

「もの読むときこ、本当に『なになに……』って言つ奴は初めて見
た」

「あなたも言つてることあるわよ」

「うそ？」

「嘘。知るわけないじゃない」

「あつそ」

可愛くないが……可愛い。

おれの隣に立つたまま、デスクに置いた紙を前屈みになつて眺める。

長い髪が邪魔らしく、片側を耳の上に乗せた。

その瞬間、ふわっと、ヤバイぐらい匂いがする。それに釣られて横顔を見たが、直視するのが辛くなつてすぐに逸らす。美人過ぎた。生きてるのが辛い。

女子高に閉じ込めておくのが、正解だったような気もする。いろんな意味で。

「でも、これって……」

露骨に興味を示す。

「一応、おれが受けた話だからな」

「橙子さんはわたしの師よ。無関係じゃない」

あるいは、鮮花が知ることを前提に送りつけてきたのかもしれない。

橙子が送つてきた封筒の中には、件の地下鉄の飛び降りの記事の切り抜きと、

『よろしく』

というメモ。

多分橙子側の都合を、口うるさい押し付けてきたつことなのだろう。

姿は見せないくせに、勝手だなあ。らしいけど。

しかし、せつかく鮮花が興味を示した事だし。そのまま放つておいて、旅行中の二人のことでごねられるのは御免こいつむる。

留守番まかされたけど、依頼もないし、どーせ暇だといつのも正直あつた。

やっぱり面倒くせーナビ。

そんなわけで、事件のあつた地下鉄に向かっている。

ビルの乱立する路地裏で、日差しが直接当たることは少ない道を選んだが、地面から吹き上がって来る熱気のせいで、余計地獄だった。

おれは着古しのジーンズに、貴いもののTシャツ一枚にサンダル。鮮花は白のブラウスに、今日は黒のショートパンツ、同色のストッキングとブーツという姿で、少しゴシックなデザインになっている。焼けたくないのか、30度を越す中で長袖。暑苦しいこの上ないが、それよりも服のセンスが橙子に似てきた事の方が気になる。

「こうやって一人で歩いてると、恋人とかに見えるのかな」

「人によるんじゃないかしら」

釣れない返事だ。おれの顔を見ようともしない。

なんか歩くペースが上がった気もする。

「とか言って、本当はおれのこと好きなんだろ?」

「ちょっとムキになつて言つた。

鮮花が宝石みたいな、透き通つた目でおれの方を見た。感情の読み取れないユートラルな表情で、じつとおれから目をそらさない。もしかして本当に好きなの? という期待感が徐々に高まって、

「ふつ」

……鼻で笑いやがつた。

なんか知らないけど、すげいショックだった。

答えの如何に関わらず、「おれはお前のことが好きだぜ」と言つてやるつもりだったのに、地下鉄に入るまで口も聞けなかつた。

お互い無言で地下に降り、入場券を変わりに一番近い駅への切符を買って、ホームの中に入る。

鮮花が両手で体をさする。

「寒い」

「夏だからな」

我ながらおかしな事を言つて居る気がする。でも夏じゃないと冷房は使わないだろう。

ホームの中は冷房が効いていたが、おれとしてはちょっとうどいぐら
いだつた。やっぱりそこらへんは男と女で、体感温度に差があるの
か。

周囲を見渡す。平日の真昼間つて事もあり、人はまばらだ。
端から片側まで向かつてホームを歩く。

「昨日人が死んだ現場つつても、淡白なもんなんだな」「
ホームや線路に、その痕跡はまったく見当たらない。一昨日より
ずっと前から繰り返されてきたであろう、地下鉄の風景があつた。
「そうね」

てつくり「当たり前でしょ」とか、そんな小馬鹿にしたお返事が
頂けると思つてたが、意外にも鮮花は同意を示した。

「とりあえず、見ていても何も得られないって事はよく分かつたわ」「
つてことは聞き込みか？ つても手掛かりなんてほとんどないし
なー。死んだ人の名前と見ていた駅員ぐらいか？ 単純な目撃者つ
てんなら、それこそ大量にいると思うけど」

生憎、事務所にいてもおれは雑用係で、調査は素人だ。幹也さん
も別に訓練を受けてるとかそういうわけじゃないし、そういう意味
では素人なんだけど。あの人は行動力がすごい。あと、友達は少な
いくせに、初対面の人に信用されやすいから、歩いた分で得られる
情報量が多い。あとおれと違うのは、集中力だな。

「うーん」

鮮花顎に手を当てた。

「ま、依頼人が橙子だしな。そんな真面目にやる必要もねーと思う
けど」

両義の家からの依頼なら、死ぬ気で聞き込みするけど。

「橙子さんの依頼なら、そういう現実的な手段は回り道になる可能
性が高いと思う」

「ああ」

そういう考え方もありか。確かに胡散臭くていろいろ残念なババ
アだが、魔術師っていうのは本当だ。

「なるほどね。じゃあ、直弟子になる鮮花なら、何か出来るのか？」

睨むような視線を向ける。

「生憎、わたしが出来るのはせいぜい火を上げる事ぐらい。後付の魔術じや相應の知覚　呪術的な情報を自分に入力するための器官や感覚が育たないんだって。あんたこそ何か無いわけ？」一応橙子さんに見込まれていてるわけだし？」

もしかしなくてもハツ当当たりだ。自分に出来ない事を指摘されるのが、鮮花はとことん嫌いだからな。

「おれも専門は出す方で、入れるのはな。出すのは得意なんだよ、ホントニイツ！」

ぶん殴られた。

「おんつまえ！　グーだつたぞ！　しかも痛え！」

「下品な事言うからでしょ、バカツ！」

「だからって耳まで真っ赤になるか？　中学生かよ」

今度は口一キックだった。

「だから痛いって！」

ブーツの硬いつま先で、的確にスネを狙つてくる。

「あーもう！　こんなとき式が……」

頭を抑えてつぶやいてから、鮮花は唇噛んで舌打ちをした。

そうか。確かに式さんなら、普通の人にはない特別な感覚のあるの人なら、この手の検査には最適ってわけだ。

「そんなに式さんが嫌いかよ」

「嫌いじゃないわ」

即答だった。

「憎いだけよ」

ナルホド。単純な乙女心つてわけじゃないんだろう。

「あ、そういえば、昨日式さんが言つてたな」

「あんた、昨日式と会つてたの？」

そつちに食いつくのか。

「ああ、まあ。夕方の中途半端な時間にいきなり來た」

「それで？」

明らかに何かを期待する眼差しでおれを見上げてくる。

「……鮮花が期待してゐるようなことはねーよ。旅行行くから、あまり物食べといてくれって、そんだけ」

すると露骨に落胆したように肩を落とした。

「そうよね。あんたにそんな甲斐性があるわけないか」

多分それは甲斐性とは言わない。ついでに言えば、『出す入れる』で顔を真つ赤にするような女に言われたくない。

「つーかいい加減諦めたらどうだよ。式さんと幹也さん、あれって恋愛感情だけの繋がりじゃねーゼ？ もっと深い……なんつーか」

「共存関係？」

「それだ。つて、わかつてんじやん。特別なんだよ」

「特別なのはわたしだって同じ あつ……」

とつさに口を押された、鮮花の顔には苦々しい表情が浮いている。つい本音を漏らした事を悔いているようだ。幹也さん以外は多分全員察していることだし、今更遅いと思う。ただ、自ら口にするつていうのは意味合いが違うんだろう。これも一種の魔術か。

「まあ、いいわ。それで式なんだって？」

「何故か偉そうだ。

「いや、事件現場で人魚を見たつて」「にんぎょ？」

首をかしげた鮮花は、すぐにその言葉の意味を考え始める。

「人魚か……それって、上半身が人の方よねきつと」

聞いたことをそのままの意味で捉えて、すぐに考えられるつていのちも、中々順応してくるなと思つ。普通は人魚なんざいないと考へる。

「キレイって言つてたから、そつなんだろうな」

普通の人間の美的感覚を当てはめるなら、だけど。

鮮花は線路を眺めて黙りこくれてしまつた。

一気に暇になる。

「あれ、お前ら」

と思つたら、見知つた男がホームの階段を下りて、こちらに向かつてきいていた。

「なんだよ、平日の昼間からテートか?」

「違います」

鮮花が鋭く振り向いた。

まあ違うけどさ。いちいち傷つくおれもどつかと思つけどさ。「何の用つすか」

「ご挨拶だな」

肩をすくめる男は、会いたいか会いたくないかで言えば確實に後者。今のところ目立つた実害はないが、めんどくさい、そういう男だ。

「秋巳大輔。一応、この国の治安維持に貢献しているらしい。

「偶然会つた大人の知り合いに対してその態度はないだろ。人生の先輩だぞ」

「ああ、人生の後輩をダシにして、女に言い寄るうとした人生の先輩ね」

別に誰が明言したわけでもないが、幹也さんの話を聞く感じだと、橙子に言い寄るうと必死だつたことは伺える。

秋巳の額に一瞬青筋が浮いたような気がした。

そして、先にはつきりさせておくと、おれはこの秋巳という男が好きではない。嫌いというほどでもないが。理由は、いろいろ。とりあえず、警察関係者というのはいい気分がしない、っていうのがひとつ。

「ま、いいや。デート以外でお前と鮮花が一緒つてことは、やっぱり例の飛び降りを追つてたりするんだろ」「何でそう思うんだよ」

ほとんど条件反射。こいつの言つ事を素直に肯定するのは癪だ。なんか知らないが、この飄々とした態度が腹立たしい。

「普段都営の地下鉄使わないお前等二人が、揃つて駅のホームに居

たら、違うつて言つ方が難しいだろ」

「あつそ」

つまらない解答だつたが、言い返せない正当性を持っていたので、

話の矛先を変える。

「そつちこそどつなんだよ」

「俺も捜査だよ」

「なら、おれらに構つてないで仕事しろよ」

「今日は非番だ調査は俺の趣味」

「休みの日ぐらいい寝てりやいいのに」

「そうしたいのは山々だけどな」

いつもどこか飄々とした響きを、言葉の端々に残す秋巳が、珍しく重い息を吐く。

切実に家にいられない理由があるつてことだ。

弱点を突くチャンスだと思い、なんだらうと、普段使つてない想像力を巡らせた。

「あ、もしかしてコジカちゃん?」

舌打ちでもせんばかりに、眼を背ける。完全に図星らしい。

「コジカというのは、最近になつて着任した殺人課の女刑事。本名は小鹿佳子。秋巳に露骨に惚れており、休日もいろいろと世話を焼いてくるらしい。基本的には素直でいい子なのだが。

「あいつとは関係ない」

だからこそ、邪険にも出来ない。多分、どんな男にとつてもやりにくい相手だろう。

「ただ、こついう『不自然な事件』を追つてりや、いつかは……」
またしても言葉を切る。今日は何か嫌な事でもあつたのだろうか。

「いつか、橙子に会えるか? 今日はボロが多いな。つていうか、

あんなクソババアのどこがいいかね」

「ババアじゃねえよ。それにいいところもあるつ」

「外面と見た目の良さだろ。本性知つたらすぐに忘れる」

「俺はその本性を知らねえんだよ」

静かな声だつたが、つかみ掛からんばかりの迫力があつた。

「とにかく、会えはなんとかなるだろ」

「なんとかつて」

「お前、本当は何か知つてるんだろ?」

「は?」

「とほけるなよ、周りにお前が現れてから、蒼崎はいなくなつた。幹也も知らないつていうし。本当に、忽然といなくなつたんだ。……ああ、そうやつてさあ、乗り遅れて行つちまうんだよなあ。なんか、見えない列車が来るのを待つてゐみたいだ」

これは、重症かもしれない。

見ていられなくなつたので、おれは秋巳から眼をそらした。

「あれ?」

いつの間にか鮮花がいない。

男同士の会話に興味がなんかあるわけもなく、呆れてどこかに行つてしまつたというのは十分考えられる。

そう遠くには行つていなかつたら、まずはホームの中を探す。鮮花にとつておれがどのぐらいのランクに位置づけられているのかは分からなが、無用の心配をさせるほど礼儀知らずでも無ければ、まして迷子になる心配をしなければならないほど子供でもない。その辺りは安心していたのだが、それはすぐに裏切られる形となる。

向かい側のホームから奇異な視線を感じた。

それが集中している箇所に眼を向けると、ホームと線路との間に腰を下ろして、足をぶらつかせている黒髪ロングの女の姿があつた。

鮮花だ。周囲を気にした様子も無く、なにやらほつとじている。駅員が気づいて走ってきた。

無用に絡まるのは面倒なのは、おれはそれ以上の速さで限りなく全速力で鮮花に近づき、二の腕を強引に掴んで、羽交い絞めちかい格好で線路側から引きずり上げた。

「何やつてんだよ、危ないだろ

結構久しぶりに怒鳴ったかもしない。

しかし鮮花は鈍く、緩慢な動作でおれに向かつて振り向いた。

「うん……えと」

「お前大丈夫かよ」

聞くがすぐに返事はない。あつたのかもしれないが、聞き取れなかつた。

ホーム電車が近づいてきてそのアナウンスが響きわたる。それとほとんど同時に、構内で誰かが大きな声で泣き出していた。見渡すと、二十代前半ぐらいの若い女の人が顔を覆っているのが見えた。

ホームに電車が接近してくる。

その瞬間、女の人が駆け出した。

ホームに向かつて。

事故で落ちたならともかく、自らの意思によつてそこへ向かつていく人を、この日常の中で誰が止められただろうか。

そして女は身を翻して落ちていった。

鉄の激流が流れる運河に向かつて。

呪われた軌跡を描き、泳ぐように空を搔くと、
血の泡となつて、この世界から消えた。

えらくゆっくりに感じられたけど、一瞬の出来事だつた。と、思う。

助けられたかもしね。けど体は動かなかつた。

「あの……」

鮮花の声で我に返つた。

彼女はぼんやりとした、表情で俺を見上げてくる。

「貴方は誰？」

信じられない言葉を聞いた気がした。信じられないと言えば、引き起こした後からかなり長い時間、胸を触っていたのだが、それに

ついて何の反応も無いのも変だ。

「あ、桃園寺くんだよね。うん、わかる。わかるけど、やつじゅなくして……とりあえず」

単純に混乱してこるとこつとは気配が違う。桃園寺くん？

「……とにかく、一旦帰るぞ」

秋日といい、鮮花といい、何かがおかしい。嫌な予感しかしない。飛び降りの現場にぞろぞろと人が集まってきた。面倒なことになる前にひとまず地上に上がろう。

うざつたいぐらい高い気温の下に晒せば、調子が戻るのではないかと期待し、おれは手を離して歩き出した。

「待つて」

「え？」

「置いていかないで」

振り返ると、ひざ崩れになつてへたり込んでいる鮮花の姿があつた。

いつも勝気な態度は微塵も無く、弱々しく、すがりつぶような視線で助けを求めている。

おれは自分の見ているものが信じられなかつた。

「寒い……」

鮮花が咳く。

「わたしは……」

地下鉄から出たおれは、鮮花をおぶつて真夏の道を歩いた。

人一人をしょつてるとは思えないほど軽い体のことと、シャツ越しに伝わる体温が、ひんやりと冷たいことが、ろくでもない事を連想させる。

歩けないと言つていた鮮花はいつの間にか、目を閉じて意識を失つていた。

呼吸音だけは微かに聞こえぐる。けど、まるで時間が止まつたようになつた。

呼吸音だけは微かに聞こえぐる。けど、まるで時間が止まつたようになつた。

最初は事務所に連れて行こうかと思つたが、人が横になるようなスペースがない事を思い出し、他に当てもなかつたから、しかたなくおれの部屋に連れて行くことにした。

それからが大変だつた。

事務所に置きっぱなしだつた、鮮花の携帯電話を持つてきて、友達が少ないくせにやたら多いメモリーの中から、まずはおれも知つている人物を探す。

助けてもらうためだ。

藤乃ちゃん、はダメか。間違いなく鮮花と仲はいいんだけど、目が不自由だし、何より今の鮮花の有様を本当に親しい人に見せると、後が怖い氣がする。

とすると、次は静音ちゃんのだが、都合を尋ねてみたところ。
『ごめんなさい今締め切り前なんですよ~』

という修羅場めいた返答が来た。よくわからないが、まあ、多くは言つまい。夏だからな。

それに、未来が見えるというわりにそそつかしい静音ちゃんを呼んだところで、状況がこじれこそすれ、良くなることはないとも思う。

それでも誰かに助けてほしかつた。

おれのベッドの上で上体を起こしたまま、微動だにしない鮮花に視線を移す。

彼女の目は虚ろでどこを見ているのかわからない。瞬きもせずじつと一点を見ている。

いや……見ている、という表現は正しくない。

向いている方向にたまたま目があるというだけで、実際に物を目で捉えている素振りはない。目の前で手を振つても、完全に無反応。しかし何より恐ろしいのは、部屋に連れ帰つてからというもの、鮮花の呼吸が完全に止まつている事だつた。

脈も、あるのかもしれないが、ほとんど感じられない。

しかし死んでいるという感じもしない。

肌は冷たいが生氣が感じられたし、上体を起こしたままの姿勢で、筋肉が変質しているような感じもない。

まるで一番美しい瞬間に時間を止めてしまったような、そんな死ぬよりも美しい彫刻をみているようだ。

その人形めいた精巧な美貌は、危うく心を奪われるような、魔性を秘めている。式さんに感じるそれと近い。

このまま、どこかに仕舞つておきたいぐらいのものであるが、このままほづつておくわけにもいかない。

式さんから留守を頼まれているのもあるし、何よりおれも健康的に動いている鮮花の方が好きだ。

けど、事情が事情だけに安易に医者に行くことも出来ないし……。鮮花の携帯電話を持ったまま、おれは途方に暮れていた。

自分の携帯は役に立たなさを呪う。

時刻は夜の10時を回ったところ。明日もこんな調子で過ぎていくのかと思うと、自然と溜息が出た。

……と、そこへ。

唐突に、床に置きっぱなしにしていた、携帯がピピピピと着信音を鳴らした。

脱稿した静音ちゃんが、冷静になつて掛けなおしてきてくれたのかと思ったがそうではなかつた。

見てみると非通知設定の電話だ。架空請求が流行っている「時勢」だが、10コール以上過ぎても、鳴り止まないので仕方なく通話ボタンを押し、スピーカーを耳にだけ当てた。

声は発しない。

『私だ』

「え？」

思わず声が漏れた。

天に助けというのかは分からない。ただ今この状況で、不本意ではあるが、もつとも心強い人物の声だった。

「…… 橙子か？」

それに答えはなく、

『首尾のほうを聞こうと思つてな』

一方的に話し始めるところことは、眼鏡はしていないらしい。けど、そんなことはどうでもいい。

橙子ならこの状況から脱する手がかり、ないしは解決手段を知っているはず。

一刻も早くそれを聞き出したい焦りと、状況を理解していない橙子の暢気な口調への苛立ちで、声が荒くなる。

「どうもこうもねえよ。鮮花が」

おれが支離滅裂にまくし立てる、受話器の無効で大きく息を吐く音が聞こえた。

おそらく煙草だろう。

『詳しく教える。順を追つて、なるべく克明にな』

眼鏡がないときの淡白な声以上に、冷たさを感じさせる声で橙子は告げた。

地下鉄に向かう階段を、おれは一人で下りる。

週末を明日に控える深夜の構内は、不気味なほどしんと静まり返つていた。

乗客が入つ子一人いないどころか、改札にも駅員がいない。灯りだけがついている。この場所が現実に存在しているのかすら、信じられなくなるような荒涼とした風景だ。

いかにも何かが出る、人以外のものが出ると言わんばかりの場所だ。今から化け物退治を試みる舞台としては、おあつらえ向きか。

人がいないことをいい事に、改札を跨いで超える。

ホームへの階段を下りる。終電は終わっているため、もちろん誰もいない。駅員ぐらいはいるかもしれないと思ったが、この空間が

死んでいるかのように動くものが存在しない。

けど、確実にここにはいるのだ。おれには直接感じ取る事は出来ないなにかが。

借り物の眼鏡なのにぴったりなフレームが忌々しくなり、ブリッジを押し上げた。

持ち上がったレンズの上の端が、一瞬異質な光景を映しだす。慌てて天井を見上げると、そこにはやんわりと脈動するように揺らめく海が広がっていた。その中にいる、浮遊するように泳いでいるのは、件の人魚に他ならない。

おれは『障壁破り（めがね）』の位置を改めて、それに焦点を合わせる。

閉ざされたいた壁が破れて、この世のものとは趣を異にする空間があれとの接点を持つ。

非日常の世界。

もしかしたら、本来いるべきかもしない世界。

「おれの世界にようこそ」

泳ぐ人魚と目があつた。

『あまり時間はない』

一通り説明した後の橙子の返事には何の意外性もなかつた。

そんなことは見ればわかる。呼吸が止まつてゐるんだから。

「だから、どうするんだよ」

『ふむ。おそらくその地下鉄の人魚とやらは、暗示によつて禁忌を想起させるらしいな。いつぞやの幽霊と違うのは、地下鉄の駅という空間を自らの結界として活用し、言葉ではなくその空間の性質や印象で陥れているところか。原理は実際見てみないとよくわからなが……ローレライやセイレーンまあこれらは厳密には人魚ではないが、水棲の魔女というのはほとんどそういうタイプになる』

言っていることはわかるが、ほとんど右から左だった。

鮮花が元通りになる方法以外には興味がない。

『彼女たちの結界というのは、本来捕食するためのものでね。人が作る結界というのは、細かい仕様はどうあれ結果的には誰かを遠ざけるために使用するが、彼女たちは真逆でむしろ積極的に誘い込むものになっている。特定の思考パターンを持つ人間に、先入観という種を植え付け、ある特定の条件が重なることで共鳴し、支配され感情を敵が口を開けて待つ場所に身を投げるというわけだ』

ホームに腰掛けているときの鮮花を思い出す。

『それはわかった。けどだとしたら変だ。鮮花は全然動かない、結界に取り込まれているなら、むしろ積極的に地下鉄に向かわないとおかしくないか』

『ああ。今の鮮花の状態は、人魚とは関係がない（・・・・・）。

鮮花自身が望んでそうなっているのだ』

「なんだって？」

『以前にも話したと思うが、魔術の戦いは尋問や交渉に喻えることが出来る』

聞いたかもしれないが、興味がなかつたのであまり覚えていない。

『自らは小を語り、相手から大を引き出す。魔術において勝利という状態は概ねこれが成功したことを指す。重要なのはいかに相手から、多くを引き出すか。尋問などにおいてはより多くを語つた方が優勢になるから、表面的な言葉で語り口や語彙を変えて詳細を何度も話すのが、かなり効果的な攻めの手段と言える。だがこれは思いの他難易度が高い。触れられたくない核心を避けながら、かつ相手の核心に触つていくためには、語る分に膨大な知識と技術が必要になる。当然嘘も吐くことになるから、それによつて生じる矛盾点から田を逸らさせることも必要になる。また、技量だけでなく恐喝といふ手段もときには必要だ。攻めに對して受けの手段だが、これは相手の語りに対しても少く少量の言葉でいなしたり、挑発することで相手が墓穴を掘ることを誘うことをいう。攻めるよりは労力が少な

い分、相手の話の要点を瞬時に理解し欠点をつく、判断力と瞬発力が必要だ。また多くを語つていらない人間というのは、感情的に後ろ向きになりがちになるから、相手の迫力に飲まれない頑なな信念も当然必要になる。……と、魔術の戦いはこれらの熾烈な駆け引きによつて、概ね勝敗が決するわけだが、唯一どんな攻撃にも守りにも耐え得る、最強と言える手段がある』

「なんだよ、それ

『黙秘だ。よく刑事ドラマで聞くだろう。あれは一切を話さず、聞かず、応じず、と決ることによつて、秘密を守るのはもちろん、自らの心を守るのに有効な手段なのだが……』

「何か問題があるのか？」

『単に人との会話でそれをやるのは容易い。耳を塞ぎ、言葉を発しなければいいだけなのだが、魔術となるとそうはいかない。魔術は相手のあらゆる入力器官、すなわち五感や六感、肉体に直接働きかけて、相手を籠絡するものだ。つまりどんなに頑張つても、必ず魔術の影響というものは少なからず受けてしまつ。これを遮断するには、五感を全て閉ざさなければいけない。そんなことをしたら、普通は死んでしまう……というよりも、五感を黙するという行為が死と何ら変わりないというべきか。だから真つ当な魔術師は誰もこんなことをしない』

魔術師自体がもう真つ当じやないだろうと、根本的な突つ込みは置いとして。

「そういう話をしたつてことは、つまりそういうことなのかな？」

『ああ。今の鮮花が、そうなのだろう。おそらく結界に取り込まれることを拒否するために、限りなく死に近い状態を、自ら選んだ。わが弟子ながらまったく考えがない』

呆れた声で橙子が言う。

「それでどうすればいいんだよ」

『別にやることはかわらない。まず大前提として、人魚の存在によつて結界が発生しているのだからそれを絶つ必要がある。本来なら

式が適任だつたが……』

旅行に行つてゐるとは、思わなかつたようだ。

『今日は、お前が行け。前に渡したものがあるだろう』

キッチンの戸棚にある。ケースに入つた眼鏡のことだ。

橙子が行方をくらます前、唯一おれに残したものだ。

『見る。そして自覚しろ。桃園寺梓記、お前には奇跡にも等しい災いの力があることを忘れるな』

橙子の眼鏡ごしになら、見えなかつたものがはつきりと見える。本来見えないものを見る魔法の眼鏡かと錯覚しそうになるが、実際のところはそうじやない。らしい。

橙子が前に言つていた。

『いわゆる靈感というのは、本来『ある』ものじやない。人間が進化する上で、靈や妖精の干渉から受ける影響を無くすために、人が身に付けた本来持つてゐるはずの抵抗力が『ない』から、視えてしまるものなんだ。式なんかは特にその抵抗力が弱い。意識的にガードしてなければ、器として優秀である故に、すぐに取り入られてしまう。しかし、過剰に弱い人間がいるなら、過剰に強い人間もいる。お前がそうだ桃園寺。もう一生、どんな訓練をしても塵ほども見えないほど、お前の魔に対する防御は完璧だ。貴重な『障壁破り』を使つてようやく視ることが出来る』

その『障壁破り』を使用したのが、今おれが掛けている眼鏡だ。心得のない人間は、掛けただけで発狂するような代物らしいが、おれにとつてはただの飛び出す眼鏡に過ぎない。

レンズの向こうで泳ぐ人魚。

微笑をたたえながら、幽鬼のように宙に浮かび漂つてゐる。しかし

その背後、彼女が浮かぶその天井には神秘とはかけ離れた光景が、映し出されていた。

一見すると綺麗な海。

しかしその実態は、ゆらゆらと海草を模すかのように蠢く髪が線路に向かつて垂れ、恐らく飛び降りの被害者のものであつ顔や手足が、バラバラになつて敷き詰められている死の世界だ。

人魚が口を開いた。

『障壁破り』を通して、音漏れを起こすようにその思念の一部を頭が拾う。

『戻ろう。居場所はない。何処にもない。愛している。愛していたはず。未来の否定。通り過ぎていく現在への憧憬。美味しい。嘘。与えられなかつた機会。どうして？ どうして？ どうして？ どうして？ どうして？ どうして？ ずっとずっとずっとただ誰かを仰ぎ見るだけの恐怖。自分とは違う自分の声が

その怨嗟に順番はなく、複数の気持ちが……記憶が混ざり合つていて、不愉快で、聞き取れたものではなかつたが、その中で唯一共感出来そうな言葉があつた。

置いていかないで。

ずっと、見知らぬ誰かを乗せた電車を誰にも気づかれること無く、見送り続けてきたこの地下鉄の人魚の、一切の欺瞞のない心だつたのではないかと思う。

かといつて見逃すつもりも、容赦するつもりも毛頭ない。見知らぬ何かより、知つている誰か。おれの過去が記憶だけのものになつてしまつてからは、とりあえずは近くにいる奴を一番大事にしようところそり決めていた。

おれは腕を伸ばす。本物の腕ではない。実際のところ、それはおれが『腕』と感覚しているだけで、本当は腕ではないのかも知れない。

あくまでもおれだけに判る感覺でそれはあるのだ。掴んだり握つたりするのは、少しコツのいる、見えない腕が。

丁寧に人魚の首をだけを掴んだ。どんなに距離があろうが、おれには関係ない。在ると判つていれば、何だつて出来る。

早い話が超能力だ。そこに『在る』とわかつてさえいれば、自由自在の事象を対象に齎すことが出来る。動かしたり、潰したり。ある意味において、未来を出現させる能力だと、説明したのは橙子だつた。でも言われたところで、はいそうですかと納得も出来ない。自分の体の事なのに、出来ることがわからないつていうのも、面倒な話だ。

考えてもどうしようもない。結論としては、今出来るならそれをやる。力が必要だと思つたら使つことにする。多分橙子もそれで納得しているんじやないかと思う。

人魚の首を掴み、そのまま引きちぎる勢いで力を込める。打ち上げられた魚のように、のたくつて悶える人魚を見て、一応呼吸は口でしているらしいと、心底どうでもいいことを考えてしまつた。そこに油断があつたか。

人魚の口から何から吹き出して、おれの身に降りかかつた。慌てて掴んでいた『手』を離した。というよりは、使うのにかなり集中力がいるから、自然に外れたんだが。

何か害のあるものかと思ったが、そうではなかつた。

「ゲロかよ、ばっちいな」

庇つた手についた奴を振り払う。あの美しい姿からは想像も出来ない下品な行為だ。でも、冷静に考えればアイドルだつてウンコはするわけだし、おかしくはないが。

問題なのは、おれがうろたえている隙に、人魚が眼鏡レンズの範囲外に逃れてしまつたこと。周囲を見渡すが、かなりの速度で動いているのか見つからない。

おれの能力の欠点だが、そこに在るとわかつていなければ何も出来ない。

地下鉄をもろとも吹き飛ばすつていうのもやれなくはないと思うが、流石に器物損壊ではすまないというか、ここに立っているおれもただではすまない。使う身が人間である、というのもこの力の大きな欠点か。

「どこだよ……」

ふと、妙な予感が背筋をなめた。

振り返る。案の定というか、そこにはゲロを撒き散らしながら大口を開いた、醜い女の上半身があつた。

多分、ヤバイ状況なのだろうが。

おれの能力は、考えたり想像したりする割合の方が圧倒的に高いために、纖細な『攻め』はものすごく疲れるが、その逆の難易度は低い。敵が目の前で、やることがわかっているなら、簡単だ。たつた一つ願えばいい。そうすれば頭突きより早い速度で、発現する。

吹き飛べ。

靈体の塊がまるで海中を漂うにプランクトンよつて、鮮やかに浮遊し……泡のよつに消える。

タクシーで帰ろうつと思つたら、財布を置いてきていた。まさに予想外だつた。

仕方なく徒步で戻つて気が付けば夜が明けようとしていた。

部屋の鍵を開けて中に入ると、カーテンの隙間から漏れている光をバックした鮮花が、相変わらずの姿勢でそこにいた。

神秘的な光景だつたが、ここままじや駄目なんだ。

変わらぬものはなくて、止まつてているのは、不自然だからだ。

おれは携帯の着信履歴から橙子の番号を押した。

『早かつたな』

おれが成功したことは、電話した時点でわかることだ。

おれは『障壁破り』を再びキッチンの棚に戻しながら、携帯電話に向かつてどこにいるともしれない橙子に話しかける。

「人魚は何かしたけど。あれは結局なんだつたんだ?」

『……輪廻』

「え?」

『人魚というのは不可思議だとは思わないか? 水から上がり、性門を汚していく事で進む事を選んだ人の足を、何故ヒレと鱗に変える必要があつたのか』

口調は問いかけるようだが、これは黙つても勝手に話すパターンだ。橙子の話は時として独り言にようでもある。まあ、友達が少ないのと、独り身が長いせいだとおれは勝手に思つてはいる。

『何故、海に戻つたのか。その必要があつたとは思わない。人が一番大切なものは、なんだと思う?』

「命か?」

おれはシンプルに答えた。

『明確な答えは出ないだろうが、私は誇り……自尊心だと思つてゐる。自尊心なんてものがなければ、自他を偽る必要もないし、金に執着するのも、手に余る権力を失つた後、無難に生きる事が出来ないのも、地位に対する執着があるからだ。人の知性がそうさせるのか。海に戻るというのは、一種の見栄なんだろう。誰の声も届かない深海で、人の目につかなければ、美しくである。そして、海というかつてへ戻りたいという気持ち。思い出は誰にとつても美しい』

「人によるんじゃねえの、それは」

『過去の記憶としての憎悪を、持ち続けるということは、その人にとって紛れもない現在であつて思い出ではない。それが妄想に近いものであつたとしてもな』

『いわれてみれば、そうかもしれない』

『穢れなく無垢であることが、美であり純粹さだというのは、願望に他ならないだろう』

そもそも美は瞬間的な価値観だ。元よりそう在り続ける事など出来

ない。個人の意思とは関係なく、何もかもが変わっていくからな。そして、変わっていくからこそ維持することが出来る。美しい過去の現身に幻想を委ねても、それは進化ではなく単なる循環に過ぎない。常に同じ規格や理念の元に造られたものが辿るのは、緩やかな滅びの道だ』

橙子が語り終えてから、少し間があつたが、彼女が言葉を吟味したりしている暇はない。

「それで、鮮花は大丈夫なのか」

『結界の大本が消えたのなら、大丈夫と言えるだろうな』

「なんだよその微妙な言い方は。まだ何かしないといけないのか?」はあ、と向こうで大きな息が聞こえた。煙草かため息かは判別出来ない。

『先に言つただろう。鮮花がそうなつてているのは、人魚が起因ではあるが直接的な原因じゃない。自分の意思でそうしている。人間は自分の意思で眠るが、快眠だつとそうでなからうつと、自分の意思ではなく半ば不可抗力的に覚醒するものだつ? そういうことだ』

「そういうことだ、つて、何を暢気に。その起こす方法がわからねえから困つてるんじやねえか」

『何をそんなに慌ててている? 普通の方法でいいじゃないか』

『普通つて』

おれは魔術の心得なんか全然ない。魔術師の基準で普通なんて言われても、おれには全然検討もつかない。

焦る気持ちをよそに、橙子はいつも増して暢気に、確かにシンブルでとんでもないこを言い出した。

『キスでもしてやればいい。眠り姫起こす方法としては、一般的

『だろう?』

『はあ!?』

『そんなこと出来るわけが いや出来るが、しちゃ駄目だつ』

『何をうろたえている? 安心しろ』

「何をだよ」

『私の印象では、お前のことはまださうでもなさそうだしな。それじゃあ、そろそろ切るぜ。今回の件で少し確認しなければならないこともあるしな』

「お、おいちよつと……ー」

切りやがった。

携帯からは、ツーシーと虚しい音だけが響いている。

まんざらでもない？

鮮花が？ おれを？

「ホントかよ……」

ぱうっと虚空を眺める美貌に目を移す。

心なしか顔の生気が増したような気がする。

半開きでやんわりと膨れた唇は、まるでそれを待っているように見えなくもない。多分錯覚だけビ。

考える。

もちろんやらなきやいけないんだが。

訓練された救急隊ですら、人工呼吸には躊躇いを感じるところ、それに近い気持ちかもしれない。

役得よりは、畏れ多い気持ちが先にくる。

……やるの？ マジで？

困ったことに悩めば悩むほど、鮮花の唇がそれこそ禁断の果実のように美味しそうに見えてくるから困った。

「ホントかよ」

もう一度口にする。

大きく深呼吸してから、洗面所にいつていつもより念入りに歯を磨いた。

「……よし」

よくないけど、いいことにしちゃおぐ。

もう何の覚悟かわからない覚悟を決めて、おれはベットの鮮花に向かって屈みこんだ。

じんわりとした、柔らかい熱さを感じた。

それが何かはわからなかつたが、悪い感じじやない。

もしかすると、わたしがどこかで求めていたものかもしれない。

ソースの匂いで目が覚めたのは、多分初めて。

直前まで何か非常にむかつく夢を見ていた気がするので、その素朴な匂いはわたしを少し癒した。

自分一人の力で立てる振りをしながら、心のどこかで誰かに助けて欲しいと願っている。そのくせ何かにつけて悲観的で、被害者面して行動しようとしている人を遠くか近くか距離感がつかめない場所でずっと見ている。そしてその人物がどうやら私なのではないかという予感がしたところで、起きた。起きてよかつた先を見たくない夢だったから。

でもすぐに冷静になる。ここは、どこだ？　わたしは生活をしているアパートに同居人はいない。食べ物の匂いや人の気配のする朝からは、ずっと遠ざかっていた。

慌てて身を起こす。

「お、ようやく起きたか」

玄関口の隣にあるキッチンから、焼きそばを持った男がやってくる。

桃園寺梓記。2年前、橙子さんに連れられて、わたしの前に現れた男だ。

そして、実はかつてわたしの同級生だった男。

事故にあい記憶に問題がおこつて、それを忘れているらしいけど。なんか、それにしては腑に落ちない。本人は本気でわたしのことは覚えてないみたい。

背が高くて粗野な、男らしい男という印象も全然変わらないのに、

過去をすっぽり忘れているっていうのは、何かおかしいと思つ。過去が変われば人格も変わるものだと思うけど。

しかし、それとは無関係に、兄はよくもこんな意味で、いい加減な男を気に入つたと思つ。

名前がシキだからだらうか。全てではないにしても一因としてはあるような気がする。

「具合はもういいのか？」

問われてわたしはふと我に返る。彼が何の事を言つて居るのか、いやそもそも……。

「ここ、どこ？」

「おれの部屋」

一瞬、息が止まるかと思つた。

「なんで？」

「地下鉄から戻つてくるときに倒れたんだよ。暑さにやられたとかだと思うけど。事務所は一人がけのソファしかないし、狭いから仕方なくつれてきた。ま、大丈夫そうでよかつた」

「あ……そつなの」

おそらく、心配していたのだろう。

「焼きそば食べる？」

差し出された皿を受け取る。キャベツとニンジンと、牛肉ではなく鶏肉が乗つて居る以外は、ごく普通のソース焼きそばだつた。貧血で倒れた相手に食べられるものかと思ったが、それは彼なりの善意として受け取つた。

といふか彼が、見た目だめでも普通と言える料理が出来るのは、少し意外だつた。

調子に乗るし、気に入らないところもあるけど、悪い人はないのはなんとなくわかつて居る。

「わたし、どのぐらい寝てたの？」

「かなり。カレンダーを見た。

「かなり。三日ぐらい」

あつさつと言われて、わたしは寧ろ冷静になつた。

「そう……」

地下鉄の調査にいってから先の記憶がない。

つまり、私はまた迂闊にも意識を飛ばされてしまったわけだ。

この男の前で寝顔を晒したのは不覚だけど仕方が無い。元はといえばわたしが倒れたのが悪いんだし。

「寝てる間に、あんた何もしてないでしょ？ うね？」

そう尋ねた瞬間、彼の目が一瞬泳いだ。
まさか、

「お前、結構胸あるんだなー」

「しんじゃえ！」

枕を投げつけた。彼はそれを器用に避ける。

「冗談だつて。だいだいその質問、イエスでもノーでもおれが悪者だろうが」

相手の立場になつてみれば、確かに。一応は助けてもらつた立場だし、それ以上の追及はしないことにした。

梓記がベッドの近くの床であぐらをかいた。

本当は今すぐ再調査に行きたいけど、まだ体がだるい。足に妙に痺れるような感覚が残つていて、上手く動けない。

「いや、それはもう解決したから」

「へつ？」

「地下鉄の人魚はおれが倒した。橙子にも報告した」

「あ…… そなんだ」

「またしても、というのか。

この誰かにおいて行かれてしまつよつた気持ち。喪失感、といふのに少し似ている。

「どうしたんだよ」

「あ、うん。別に……」

「気に入らない」

「考へても仕方ない。」

「気に入らない」

「ん？」

「なんだか、いつもわたし以外の誰かが、わたしのことを解決している気がする。あの時も式がそつだつたし」

「嫌なのか？」

「嫌つていうか、うん、嫌だけど。でも橙子さんの依頼だつたわけだし、わたしは何とかしたかった気持ちは」

自分でも、なんでこいつにこんな事を話してんだらうと、疑問に思つたが口が止まらなかつた。桃園寺梓記は誠実かどうかはともかく、わたしの話を無視したりはしないだろう。

「ううん。わたしのが、何とかしたかった。魔術師として、わたしに何かが出来ることを証明したかった」

偽らざる本音を口に出す度にほつとした。

梓記の方はいつもと取り分け調子を変えた様子も無く、床に座つたまま焼きそばを啜る。

「そもそも、鮮花は何で魔術をやうつて思つたんだ」

思わぬところから質問が来た。その質問を、まさか焼きそばを食べながらされるとは思つていなかつた。

「そりや、式に勝つためよ」

「何で」

「何でつて……」

何故か、即答が出来なかつた。

「そもそも、ただ勝つなら別に魔術じゃなくてもいいだろ。式さんがいくらす」「くとも、基本は人間なんだし。それこそ亡き者にしたいつてんなら、手段はいくらでもある。でも、そんなことをしても、鮮花が得する事つて、実は何もないだろ」

わたしが、多分意図して考えようとしていた事をずけずけと言つてくる。けど、……そうだ。わたしがいくら強くなつて、式以上である事を証明できたとしても、兄が、幹也の気持ちが動くわけじゃない。

それどころか目的が果たされた時点で、わたしは梓記が言つよう

に『失敗』してしまった。

「何で、そんなこと言つたのよ」

「なんつーか、お前このところずっと苛々してゐみたいだつたし。まあ、予備校のストレスかと思つたけど」

「殺すわよ！」

合格発表を迎えた寮での記憶がよみがえつて、反射的に叫んでいた。

「わたしはわたしの力で式に勝つの！ 魔術を選んだのは、格闘技をやるよりよっぽど現実的だからよ」

「うーん」

「何悩んでるのよ」

焼きそばを口元まで持つていきながら、話すために皿に戻した。「鮮花はそもそも、式さんに勝ちたいわけじゃないんじやないかつたんじやねえかつて、思つんだけど」

「じゃあ、何なのよ」

彼が焼きそばを啜つてから、

「幹也さんに見て欲しいとか、そういう気持ちで、単に何かがしたかつただけで、実はその内訳はどうでもよかつたんじやないかつて「あ……」

それはわたしが無意識のうちに無視していたことにも気づいていなかつた、心の奥の図星を的確に突く言葉だつた。

明確に言葉にされて、初めて気がつく。むしろ何で今まで気づかなかつたのか、何故目を背けていたのか。他に夢中になりすぎて、単に盲点だつただけなのか。いや、といふか。

「何でわたしが兄さんのこと、その」

「……気づいてねーのは、幹也さんだけだよ」
呆れた調子で彼は言った。

そうなのか。えつと、この男にすらバレていたつてことか。
なんかショックだ。

「けど、わたしは本気で式が憎くて」

ほとんど意地でそう答えていた。

「でも嫌いじゃないんだろ?」

「ええ」

わたしはそこに矛盾はないと思つてゐるけど、
「嫌いじゃないけど憎いとか、そんな変な話はねえよ。憎はなくて
も敵、とかはあるかもしないけどさ。好きとまでは言わなくとも、
式さんに対してもネガティブな感情なんか、本当はないんだ。魔術を
選んだのは、幹也さんの雇い主の橙子が魔術師だったからとか、心
配されたかったからとか、大方そういう事だろ」「

「違う。あんたに判るつて言うの?」

「何にも。何となくそんな気がするつてだけだよ」
他人事みたいに言いながら、焼きそばを食べ終えた梓記がキツチ
ンへ下がつていく。

まったく、梓記、といつて前の人はどうしても、言つてく
い事を言つてくれる。
そうやって、わかつたような顔をして、わたしの前を通り過ぎて行
くんだ。

「仮に式の事を嫌つてないとしてもよ~一回『せやふ』と言わせて
やりたい、この気持ちは本當よ」

「あの人は『ぎやふん』とは言わないだろ。まあ、見てみたいけど
さ」

焼きそばを載せていた皿をすぐに洗い出す。この男の、いつも
姿を見るには、なんか意外だ。

「そんなどこだわらなくとも、好きだって男も女も他にこつぱい
るだろ、お前の場合や」

簡単に言つてくれる。わたしは自分自身の姿を手に入れるために
半生を捧げたと言つても過言ではないのだ。いつも曲げられるも
のじゃない。

「それに、誰かに好きなんて、面と向かつて言われた事無いわよ
一応事実だつた。というか、学校でもわたしに寄り付く人は案外

少なかつたから。

キッチンにいた梓記が意外そつな表情でわたしを振り返り。

「ふーん。おれは、お前のこと好きだぜ？」

……な。

「な、な、なんて事言つのよー。」

「おつ？ 意外と焦つてる」

おもしろおかしそうな表情が憎らしく。

「焦つてない！ ただその、驚いたといふか……つていうか、何が好きなわけ？」

「見た目」

「はつきり言つわね……」

わたしも見た目に自信がないとは、言わないけど。

「だつて性格は問題だらけだしなー」

「殺すわよ」

「ほら、殺すとか言つ」

お嬢様のくせになー、と付け加える。

生憎だけど、わたしのお嬢様は完全に外付けで、生糞のものじゃない。

「まあ、とにかくさ。幹也さんのことと式さんのこと、本気になれないんだつたら、もう諦めた方がよくなきか、つておれは思う」「そんなことは言われなくてもわかっている。

けど、それをやめたら、わたしはこれからどうすればいいのか、わからなくなりそうで そうだ。もう、とつぐにわたしは別に兄に固執しているわけでも、式が憎いわけでもない。

ただ、それが無くなることで、自分が否定されるのが恐ろしかった。

いつの間にか兄を、黒桐幹也を見ていない自分が自分でないと、思い込んでいた。

なんて

なんて失礼な恋愛感情だらう。

「変わらぬものの方がさ、少ないわけだし。ほら、式さんだって結婚してから丸くなつて仕方ないし」

長く伸ばした髪。

お嬢様然とした格好。

魔術。

礼園への転校。

わたしはあまりにも多くの自分を、兄に費やしてきた。
けどもういいんじやないかと思う。

変わつてしまつても、いいような気がする。

今までのわたしにも、なんか飽きてきた気がするし。

「そうね」

わたしは長い髪を撫でた。

寝ていたせいか、乱れて、ぼさぼさで、実はとんでもなく恥ずかしい姿を、桃園寺に見られているのだという危機感が、今更のようにやつてきただけ。

そんなことは気にならな「ぐら」、今は妙に晴れやかな気持ちだつた。

変わつてしまえばよかつたのだ。

ずっと同じ場所で循環するのではなく。

ゆつくつと、螺旋を描きながらでも前に向かつて。

幕間

地下鉄のベンチに一人の女が腰掛けている。

一人は黒い髪の、今にも折れてしまいそうな印象のある女だった。大きく膨らんだ腹を、大事そうにゆつくりと撫でながら、何かうわ言のようにぶつぶつとつぶやいている。

もう一人は赤髪で長身。

各々の姿も去ることながら、その組み合わせが目立つことを前提にしているようなものだったが、車掌を含めた通行人たちはまるで

彼女たちが最初からいなかつたかのようになり過ぎていいく。

おそらくは、そこで交わされたやり取りは全て、彼らこといつては無かつたものなのだろう。

「君が、あの人魚の本体だな？」

黒い髪の女が、隣に座つた赤髪をよつやく、氣するそぶりを見せた。

赤い髪の女 蒼崎橙子は淡々と話を始める。

「私は君が襲つた女の子と、君をバラバラにした男の知り合いだよ。名乗るほどのものじゃないし、君の名前にもあまり興味がない。無駄は省こう。」

赤い髪の女は既に、かなえみゆ袈縫三由という女の名前を知つていて、それは単に調査の過程で見つかった情報で、彼女にとつては名前ではなく対象の名称に他ならなかつた。

「一、二聞きたい事があつてね。まだこちらの言葉は使えるのだろう？」

女はパクパクと口を動かしたもの、その言葉は橙子の耳には届かない。

「既にズレ始めているか……。わかる言葉だけ選べないのか？」

橙子がそう促すと、喘ぐよつに動いていた口の動きは落ち着き、やがて声を発した。

「……久しぶり、人と話したのは」

まるで立つたばかりの子供のよつこ、拙い話し方だつた。

「心細かつたか？」

「いいえ」

「では、心細いと思わない自分を恐れたか」

答えはない。

何かを話そうとしている素振りはあつたが、橙子にその意思が伝わることはなかつた。彼女からは、既にこの世の言葉は失われている。

「人とは、端的に言えば言葉の存在だ。まず初めに、光あれと言つ

た誰かが、私たちを私たちたらしめているのだ。自分が人間であるという信仰をやめた時点で、君にしての未来はなくなつたわけだが

橙子はポケットからソフトケースを取り出した。銘柄はチエリー。タバコを吸うという行為 자체を趣味にしている彼女にしては珍しく、自分の好きな味のものを選んだ。

日本のタバコとしては重めで基本的には辛い部類。酸っぱい、という表現が一番しつくりくる味だと橙子は思つている。

「タバコ、吸わないでよ」

だが橙子は構わぬ吸い続ける。

既にこの世との交わりを絶つてゐる彼女には、過去の言葉を再生することしか出来ない。

タバコが何故嫌いだつたのか、その理由もわからないに違ひなかつた。

「私は君がこれからどうなるかには、あまり興味がない。手の施しようがないからな。君の体も人格も、既に再現するのは不可能だ。だから、今日は過去の話をしにきた。私の質問に、自分の知つてゐる言葉で答えてくれればいい。何故、君はここにいるのか」

吐き出した煙が、空中に溶けると、彼女は口を開いた。

「兄を想つて東京に来た」

まるで再生スイッチを押されたテープのように、ゆっくりと話しが始める。

「間違ひなく愛し合つてはいたはずだつた」

彼女はその細い手で、大きなお腹を撫でる。

袈縫の家は、今は社会常識の移り変わりとともに廃れているもの、血の濃い家であるということは、橙子も把握していた。

彼女はその末裔であつたのだが、一年ほど前に失踪し、兄を追つて上京していた。

「けれど兄は遠くへ行つてしまつた。知らない、私以外の誰かと。こんなに苦しいなら、愛さなければよかつた。裏切られるぐらいな

「……信じなければよかつた」

「そこに道があるという時点で、進むこと拒否することは出来ないよ。残念ながら、その進んだ道に応じて罪を背負うしかない。逃れることはできないし、得ようとする限り、失わないこともない」

「彼は……永遠になれると言つた」

「それを信じるのは愚かなことだよ。この世に絶対なんでものがあるとすれば、それは壊れることだけだからな。従つて浮世に永遠はない。君が今こうしているにも、引き込んだ女たちを糧にしなければならなかつた。もう今更ではあるが、君の望むものは決して手に入らない。甘い夢を見続けるにも、対価がいる」

返事は無い。彼女にはもう未来を選び取ることは出来ない。

糧を得るための器と結界を失い、ゆっくりと崩壊を始めている。

「まあ、いい。私としては、本当は君に人を忘れさせ、新しい器を与えた人間を聞いたかつたが、もう時間もないようだ。何か、心残りがあれば聞こつ」

「……お花。部屋に置いたままになつてゐる。郊外のアパートの二〇一号室……。世話をやめて枯らしてしまつなら、寂しいなんて理由で、買わなければ……よかつた」

「……そうか」

ずっとお腹を撫でる動きを繰り返してゐた手が止まり、だらりと宙に垂れる。

それを合図に彼女の体は崩れて、ベンチから落ちた。

橙子はそれを見て立ち上がる。

今まで何事もなくホームを行き来していた人たちが、突然出現したそれに気づくと、あたりは騒然となつた。

あつという間に人の輪が出来る中、たつた一人、赤い髪の女が去つていつたことには、やはり誰も気づかなかつた。

一週間前の午後、件の地下鉄駅ホームで、女性の変死体が発見された。

痩せ細った肢体の股が大きく割れて、そのあわいから大きな肉の塊が生え出していた。

その有様は一見して人間とわからぬいぐら異様なものだ。

後の調べでどうやらその肉塊は、その女性の赤子の成れの果てということがわかつたが、一体何故そのような状態になつたのかはわかつてない。

その遺体は、死後数ヶ月経過していたが、いつから駅構内にいたのかは不明だつた。

場に居合わせた人が皆口を揃えて、何もいなかつたはずの場所に突然死体が現れたと証言し、普段から駅を利用していた人も、誰も気づかなかつたという。

そのために、いつどのように彼女が死んだのか、事件は謎のままでいう状況が続いている。

その謎めいた要素を、続いていた電車への飛び降り事件とかこつけて、呪いではないかと騒ぐところもあつたが、もちろん関連性が見出せるわけもない。

真相は知られることなく、ただ異質な事件として消えていくのだろう。

おれはその後もしばらくその事件のことを気にしていた。

関わった事件ではあるし、鮮花のこともあつたし、何より本当に終わつたのか、各章がもてなかつたからだ。

「まるで海から陸に上がり損ねた魚のようにも見えた……か」

おれは今朝、事務所に来るときに買つてきた週間誌を閉じて、机に置いた。

この事件に関する」と記事を読むのは、今日で最後にしよう。

何故なら今日から、幹也さんが戻つてきているからだ。

少し事務所自体もばたばたしている。

幹也さん不在時にためた仕事を消化したり、一緒に顔を出した式さんがあの未那ちゃんを抱こうとする度に、死ぬほど泣かれて泣きそうな顔をしたり。

慌しさ以上に事務所 자체が、物理的に煩かつたわけだが。

そんな雰囲気を一瞬にして冷やしたのは、唐突に響いたドアロックのテンキーを押す音の後に現れた一人の少女だった。

一体彼女が誰なのか、多分一見しただけでは全員がわからなかつた。さらにそれだけでは收まらず、

「おはようございます、義姉さん。今日はこっちに用ですか？」

なんてことを口走つた。

「……鮮花か？」

おそれおそれの口にする式さんには、

「そうですけど？」

何もおかしなことはない、と言わんばかりに答える鮮花。

それは、それが当人にとつては何も変じやない。

けど、長かつた髪をぱつぱつ切つて、あらつことか式さんを「義姉さん」と呼んだのが鮮花だとは、誰も思つまい。

幹也さんは、一見いつもの調子だったが、驚きを隠し切れてはいなかつた。

式さんに至つては「え、え……？」とか、「どうじよつ」とか、おれに小声で助けを求めるぐらいい、うろたえまくつていた。面白いので、記念に事務所のデジカメで撮影しておいた。

明日の天気を本気で心配しないといけないぐらいの豹変だった。

けど、もしかすると人間が変わるということは、本当はこういう風に脈絡もなく、計り知れず唐突なものなのかもしれない。

そういうことを過去にしながら、どんどんそれが当たり前の現実になつていく。

おれのこまいち繋がらない記憶も同じようになつた。

過去がわからないことを過去にしながら、桃園寺梓記といつ人間が進んでいくみたいに。

それは仕方のないことで、そして同時に喜ばしいことなんだろう。

「鮮花

「何?」

「可愛いじやん

短く切つた襟足を指す。

彼女は何とも言えない表情を浮かべてから、少し不機嫌そうにそつと顔を逸らした。

了

第一章（後書き）

原作でスポットのあまり当たらなかつたら鮮花をヒロインにすべくいろいろ画策していますが、鮮花つて元々がサブキャラ気質な上に、プラコン要素を解消していくと、後付で個性を創る必要があつて結構大変だった……。

序章も含めて、各章どこから読んでも大丈夫なようにしていきたいなあと思っています。

次回は第3章。原作でいう「痛覚残留」枠の話を更新予定で、2月9日（劇場版公開の日付）に合わせて公開します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0294z/>

空の境界 完全斯界ファントムズ

2011年12月29日21時49分発行